

合鴨家族の20年—進化し続ける合鴨水稻同時作

●古野隆雄・久美子

第21回・1996年受賞。合鴨水稻同時作の確立と普及を通じて日本とアジアの農業に新風を送る

私が山崎記念農業賞を頂いたのは1996年でした。受賞理由は「合鴨水稻同時作の確立と普及を通じて日本とアジアの農業に新風を送る」でした。今振り返ると身に余る評価でした。私は63歳になりましたが、新風ならぬ向かい風の中で相変わらず試行錯誤を繰り返しながら、家族で有機農業を続けています。

この20年間は、私にとっても世の中も激動の20年でした。

いつも賑やかな合鴨家族

私の有機農業の最大の目的は家族で一緒に働くことです。5人の子どもたちは、いつも私たちが働いている田畑で遊び手伝い大きくなりました。長男が小学校1年生になった時、ニワトリと合鴨の一切の世話を長男と次男に任せました。

その2人が、現在我が家で力を合わせて有機農業をしています。長男は結婚をして2歳の子どもがいます、3人の研修生も加わり、「合鴨家族」はいつも賑やかです。

当時の経営は合鴨水稻同時作1.3ha、有機野菜0.6ha、ニワトリ200羽でした。現在は合鴨水稻同時作7.3ha、小麦2ha、野菜2ha、ニワトリ200羽、合鴨ヒナ4,000羽、他に漬物、味噌、餅、小麦粉等の農産加工品もあります。

息子2人が就農して楽になったかという、必ずしもそうではありません。息子たち

は、水田輪作の玉葱やジャガイモやニンニク、そしてトマト、カボチャ、ニンジン、ゴボウ等の栽培面積を拡大しました。この新しい部門と従来の経営との整合性をどう保つかが課題です。とりわけ田植えの季節は、田植えとジャガイモ、玉葱、ニンニクの収穫、合鴨放飼も重なり、てんてこ舞いです。

一つ一つの作物というより百姓百作の多様な有機農業を、息子たちの自主性を発揮させながら、楽しく全体的に経営していかなければなりません。

人手不足に悩む地域の状況

この20年で地域の状況は一変しました。当時、イネや苺を作ったり、兼業をしたりしていた農家のなかで、いつの間にか、高齢化、後継者不足で離農する人が目立つようになりました。現在、稲作を続けている農家も言っています。「コンバインが壊れたら農業を止める。息子にはさせん…」。

現在でも地域で担っている水路の維持管理が人手不足で難しくなっています。これから先、地域の農業はどうなっていくのでしょうか。

政府は六次産業化とか農地の集約化を提唱していますが、1戸の大規模農家が出現しても地域が元気になる訳ではありません。

さらに私の町の大規模農家の現状を見る限りほとんど若い後継者はいません。法人も同じです。トラクターやコンバイン等の機

械の更新はできても、人の更新はできていないのが現状です。

地域の問題の本質は「人」にあります。地域づくりを、行政に頼るのではなく、自分たちで本気に考えなければならない時代になりました。

激減する生き物たち

私は37年間有機農業を続けています。毎日田畑に立ち、地域の自然を「定点観測(?)」してきた訳です。近年、身近な生き物の世界で異変が起こっているようです。

以前は春の菜の花畑に立つと、蜜蜂の羽音がブンブンと聞こえ、頬に当たるぐらいいました。ところが近年は不気味に静かです。蜜蜂、ワバチ(日本蜜蜂)、ハナアブ、チョウなどの訪花性の昆虫が激減しています。

春の躍動感美しい花だけでなく、それを訪れるハチやチョウがいてこそ実感できることを気づかされました。

鳥の世界にも異変が起こっています。20年前なら春の晴れた日には大空のあちこちで、ヒバリがうるさいくらいに競い合って鳴いていました。近年は広い大空で2、3羽のヒバリが鳴いているだけです。

近年どこにいても案山子が立っていません。スズメが激減しているからです。夕焼けに照らされながら竹藪にスズメの大群が集まるスズメのお宿は全く見なくなりました。このままでは、孫に舌切りスズメの話をする時に鳥類図鑑が必要になるかもしれません。

また、ヒヨドリやムクドリやメジロが激減したためか、モチの木や、ナンテンやウメモドキの赤い実が各地でいつまでも美しく木についています。

アリやカヤハエやトンボやセミも激減しています。このままではカラスと人間しかいな

い世界になるのではないのでしょうか。トキやコウノトリや生物多様性ばかりが世間の耳目をひいている間に、もっと大切な身近な自然が大崩壊しているようです。

有機直播の原理が見えてきた

多くのものが変わりますが、変わらないものもあります。技術の創造もその一つです。私は具体的必要性に迫られ合鴨水稲同時作の技術を創意工夫し続けてきました。

2003年から省力化を図るため乾田直播と合鴨水稲同時作を組み合わせた合鴨乾田直播に取り組んでいます。乾田直播では乾田状態で催芽した種モミを直接播きます。4～7日で出芽しますが、ヒエも同時に出芽します。これをそのままにして、乾田に水を入れ合鴨を放しても、丈夫なヒエには歯が立ちません。ヒエの除草のためにと合鴨を早く放せばイネも傷みます。

この問題を解決するために、2007年から久留米の農機メーカーであるオーレック社の開発部と協同で乾田初期中耕除草機をいろいろと開発してきました。スパイラルローターの使用により条間の中耕除草は完璧にできるようになりました。

しかし乾田の株間の除草はできませんでした。そこで昨年、鋤と正確な培土という具体的なアイデアを出して試作機を改良してきました。この機械とイネが水没する16センチの深水と、その後の合鴨放飼により、本年の直播の田んぼには、ヒエの発生は信じられないくらい少なく、イネが豪快に育っています。

10年超しのチャレンジで、「有機直播の原理」が少し見えてきました。面白くなってきました。

報告／古野隆雄(古野農場)